話し掛け得る あなたをもとめて

（パウル・ツェラン）

佐藤　いつ子

「平和教育は岐路に立っている。」（25年11月3日、朝日）。戦後80年の特集連載で、戦時下の学校日誌を調べ、墨塗り部分解説に取り組む研究者が、こう締め括っていた。現役教員の大半が、その親も戦後生まれとなった今、個々の教員は勿論、学校も、〈平和教育〉の使命と責任を負うものではない。「将来の平和教育を作っていく子どもたちにどう語り継ぎ、教えて行くか」（前述研究者）は、教育現場が問われることではない。〈国を挙げて〉取り組むべきと、私は心底思っている。1948年生、戦争の残骸にまみれて育った世代だ。夕方の「尋ね人の時間」、祭りや正月に見る、松葉杖、隻腕の、戦闘帽に白衣の男の人達、村の墓地に何基も立つ「陸軍上等兵」「陸軍伍長」の他より立派な墓石、特攻崩れというおじさん、〝ヒロポン〟のこと……。「お前の学費は傷痍軍人恩給からだ」が止（とど）めだった。学校で習う「太平洋戦争」は年表事項の説明を越えなかった。国は教えないことを求めて来た。けれども、毎年8月に現われる、過去の〈不幸な出来事〉が戦争であると、戦争は環境と死に尽きると、その戦争がもたらした全ての事実の反対を拾い集め、繋ぎ合わせれば、〈平和〉の像を感じるくらいはできると、大人も子供も知っているはずだ。その〈知っている〉に触れることを模索したい。

5月25日、「和をのぞむ」碑への献花は、コロナ状況下も活動をと、2人で道行く人に呼び掛けたのに始まり、ここ3年は地域ニュース、新聞、に報じられている。多くの協力を得て成る追悼の集いでは、体験者のお話、小学生から大学生までの若者による朗読、音楽の必要を伝えたいと参加してくれるピアノとヴィオラの演奏が、空襲で焼けた小学校の体育館に集う人々に手渡され、話し合いがもたれた。

近隣の小学校では、献花や朗読参加も含めて〈平和教育〉が続けられ、特別授業で体験者のお話を聴いている。その手伝いに手紙を書く機会を頂いた。一部を記したい。

「……八十年前も、今空襲にさらされているところも、私達からは遠いです。――実際にその場にいなければ、本当に何が起こったのかはわからない。戦争は楽しいものではない。多くの人が経験する必要はないんだ。――硫黄島で闘った、今年百歳のアメリカ兵の声です。遠さは、時間と距離の他にも生じるのですね。私達は、その遠さを秘密を思うように自分の中で受け止めて、考えることができます。お話、新聞やテレビから知った出来事に、心がちぢれるようであったことを誰かと話してください。身近にいる大人のほとんどが、みなさんと同じ〈戦争を知らない子供たち〉だったのですから、いろいろ話し合うことができます……あの戦争では、これからも世界が決して忘れてはならないことを、いくつもの国がしました。日本が中国や東南アジアの国々を一方的に攻撃したことも、アメリカ軍が日本中を爆撃したことも、その内の一つである「山の手空襲」も忘れてはいけないです。みなさんは、それを知っている人でいてください。……」

小学生からの返事が届いた。その一枚を……

「ずっと前の『山の手空しゅう』だけど自分のできる知って、考えて自分の行動を

見直すという事はやっていたいと思った。じゅ業でやったからでなく自分かも（ママ）きょうみもって知って考えていきたいです。」５年女子

話し掛け得る現実は在ると思う。「岐路」は途方に暮れる場所ではないと思う。

（さとう・いつこ／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）

過渡期のための共同作業
——「山の手空襲」80周年追悼　朗読と音楽の集い

山本　唯人

今年の7月13日、港区青南小学校体育館で、〈「山の手空襲」80周年追悼　朗読と音楽の集い〉（以下、集い）が開催された。集いは２０１６年から始まったもので、２０２０年からコロナ流行のため中断したが、昨年から復活し、今年で6回目を迎えた。アジア太平洋戦争の体験を伝える活動は、いま、過渡期を迎えている。戦争体験を持つ世代が減り、その世代の方たちから、「直接、お話を聞く」という受け継ぎの方法が難しくなった。そうしたなか、今年の集いでは、この「過渡期」を表すような二つの変化があった。

第一に、従来から集いを主催してきた実行委員会と港区との共催が実現したことである。第一回の集いから実行委員会は、『表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』正・続を編集・刊行した『表参道が燃えた日』編集委員会、地元の穏田キャットストリート商店会、和・ピースリングの3団体で構成されてきた。昨年11月、港区より、表参道交差点・記念碑前での献花とこの集いの開催について、連携の打診があった。その後、実行委員会と港区の協議の結果、二つの行事を両者の「共催」によって行なうことになり、広報や会場の確保、当日スタッフなどについて、港区の分担・協力を得て運営できた。表参道周辺で港区と並ぶ被災があった渋谷区とどう連携するか、そもそも、「山の手空襲」とはどの範囲の空襲を指すかなど繊細なテーマを抱えながらも、集いという営みを継続する上で、注目すべき変化の一つと言えるだろう。

第二に、「体験者が話し、非体験者が聞く」という従来のスタイルが、変わってきたことである。集いは毎年、地元で学ぶ学校生徒による体験記の朗読と、体験者のお話という二つのパートを軸にしてきたが、今年は、実行委員・佐藤いつ子さんの台本により、ピアニスト・佐藤麻理さん、ビオラ奏者・飯顕さんの音楽と子どもたちの朗読が交互に進行し、その節目で体験者が話すというスタイルになった。前奏の音楽や朗読で文脈が示されれば、その分、「聞きやすく」はなるかもしれない。しかし、空襲体験が「音楽劇の一部」のように聞き流されてしまうのは本意ではないだろう。少し不安に思いながら本番を迎えたが、いざ聞いてみると、意外なほどにマッチして、聞きごたえがあった。台本と音楽と朗読と体験者のお話と——体験した者と体験者から学んで伝えようとする者たちとの、絶妙な共同作業によって、この「語りつぐ」営みを

「山の手空襲」80周年追悼
朗読と音楽の集い
日時　2025年7月13日（日）
開場　12:30　開会 13:00　閉会15:00
場所　港区立青南小学校 体育館
主催　山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会　港区

今も昔も変わらないのは表参道の欅並木である。毎年春になると青い芽が吹き冬になると落葉する。戦災で何本かを残し、焼かれて植え変えられた。焼け残った欅は参道でのすべての事象を知っているけれども教えてはくれない。……悲惨な戦争は二度と起こしてはならない。
佐藤　銀重
（『続 表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』より）

アジア・太平洋戦争中、港区を含む「山の手」は何度も空襲を受けました。中でも1945年5月25日夜からの空襲は特に被害が大きく、表参道周辺などで多くの人が亡くなりました。
2016年以降、「山の手空襲の体験を次の世代に伝えていくこと」、「歴史から学び、戦争を二度と起こさないようにすること」の2つを趣旨として、山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会によって、集いが開催されてきました。
2020年、新型コロナウィルスの流行で集いが中止となり、それに替えて、5月25日当日、道行く人たちに慰霊碑への献花を呼び掛け交流する活動が始まりました。2024年、集いは復活しました。
2025年、山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会と港区が共催で、献花と集いを開催します。

港区政六十周年記念碑（「和をのぞむ」碑）
山の手空襲の体験者などの署名運動を受けて、2007年、表参道交差点・みずほ銀行（旧安田銀行）脇に、港区赤坂地区総合支所・区政六十周年記念事業実行委員会が建立した。港区政60周年にあたり、戦災により亡くなった方々を慰霊し平和への願いを込めて作られた記念碑である。
山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会では、2020年から毎年5月25日にこの追悼碑前で献花の集いを行なってきた。写真の左手奥に見えるのは表参道の石灯篭。台座には、焼夷弾で削られたとされる痕が今も残る。

『表参道が燃えた日
—山の手空襲の体験記』正続
追悼碑建設の署名運動がきっかけとなり、「表参道が燃えた日」編集委員会により、山の手空襲の体験記集が2冊刊行された。1冊目は2008年（増補版2009年）、2冊目(続)は2011年に刊行された。1冊目の初版および増補版は品切れ中、2冊目(続)は表参道交差点の山陽堂書店で購入できる。

https://shitayasouko.wordpress.com/
ウエブサイト
「思い出すままに　中村道子
戦争と原宿と出会った人々」
山の手空襲を語り伝えてきた中村道子さんの戦争中の回想記を読むことができます。2025 年開設。

協力
港区立青南小学校PTA
池田敦子　池田勝富　古賀麻里　木村恵理
小池秀憲　録音・撮影
商店街振興組合 原宿表参道欅会　写真提供（表紙）

山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会
共同代表　泉宏　佐藤銀重
実行委員　有馬保彦　大坪昌広　岡本和子　佐藤いつ子　大坪昌広　鳥山敦　なかのゆか　西田和子　馬場聖子　比留間柏子　山本唯人　吉田道子
運営協力　「表参道が燃えた日」編集委員会　穏田キャットストリート商店会　和・ピースリング
連絡先　山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会　070-6528-5622
港区総務課人権・男女平等参画係　03-3578-2111（内線2014）